



**Nihon kinsei chûki kôki ni okeru kôshô seido Kyôto no Shimabara
yûkaku no yûjo no sonzai, shakaiteki mibun, ichi wo megutte 「日
本近世中期・後期における公娼制度 京都の島原遊廓の遊女の
存在・社会的身分・位置付けをめぐって」**

Sarah Vallette d'Osia

► **To cite this version:**

Sarah Vallette d'Osia. Nihon kinsei chûki kôki ni okeru kôshô seido Kyôto no Shimabara yûkaku no yûjo no sonzai, shakaiteki mibun, ichi wo megutte 「日本近世中期・後期における公娼制度 京都の島原遊廓の遊女の存在・社会的身分・位置付けをめぐって」. kamizono 神園, 2018, 19. <hal-03125629>

HAL Id: hal-03125629

<https://hal.science/hal-03125629>

Submitted on 21 Feb 2021

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

日本近世中期・後期における公娼制度

――京都の島原遊廓の遊女の実在・社会的身分・位置付けをめぐって――

サラ・アンベルバレット・ドシア

一、序文

江戸時代の売春婦には三つの類型がある。公娼であった公認遊廓の遊女、私娼でも黙認された宿場の飯盛女や岡場所・花街の茶立女などの売女、非公認の私娼であった夜鷹・惣嫁などと呼ばれた隠売女であった。私の博士課程での研究は公娼制度という特殊な組織の中で奉公人として仕えた遊廓の遊女を対象とする。

江戸中期から売春の形・本質が変化し、徐々に産業として確立されていった。売春の大衆化がもたらした膨大な需要や顧客からの要求は、それまで社会のエリートのみに向けられていた廓遊びだけでなく、遊女の生活・イメージに

も大きな影響を及ぼした。そうした変化の中での遊女の実態を把握するため、江戸中期・後期に焦点を当てた。

また、京都の島原遊廓は公娼であり、売春の大衆化や性の商品化の影響を受けながらも、吉原と違い、その伝統や高級なイメージを守ろうとした。これまでに研究が進んでいない、この大変興味深い事例を研究の中心に据えたい。

二、先行研究の紹介

本研究において、参考とする研究成果がいくつかある。まず、家族史や文化史の観点から離れ、ジェンダー史の観点から、遊女を女性として分析した長野ひろ子氏・脇田晴子氏・藪田貫氏らの研究である。そして、江戸時代の売春

について、奉公人や人身売買の問題と関連させて考察した、中田薫氏・牧英正氏・渡邊大門氏・下重清氏らの社会史学者・法学者の研究にも触れる。さらに、社会的な視点を取り入れるため、今西一氏著『遊女の社会史——島原・吉原の歴史から植民地「公娼」制まで——』（有志舎、二〇〇七年）、また『娼婦と近世社会』（吉川弘文館、二〇〇三年）をはじめとする、曾根ひろみ氏の論考も参照する。そして、日本近世から近代における「遊廓社会」の形成を比較類型史論・都市社会Ⅱ空間構造論の方法を用いて共同研究した佐賀朝氏・吉田伸之氏編『シリーズ遊廓社会』全二巻（吉川弘文館、二〇一三・二〇一四年）という先行研究も参考にしたい。この共同研究をもって、売春という行為や身分的周縁にあった廓の人間たちが江戸社会の中心にあったことが理解でき、江戸時代の社会の本質を把握するためには売春を抜きにはできないことがわかる。私の研究は、この視点を踏まえたものとして進めていく。さらに、比較類型史論の視点が重視されているため、先行研究の少ない京都の島原遊廓を対象とするのは価値があると考えられる。グローバルな視野を含むよう、米国歴史家エイミー・ドルー・スタンリー氏をはじめ、諸外国研究者の論文や江戸期の欧米における売春研究も参考にしたい。

すなわち、本研究においては、前述の様々な研究成果を

さらに、売春の大衆化の中、遊女はどのように商品化されたのか、そのイメージ・扱い方はどう変化していったのか調査する。

また、遊女は幕府の公娼制度の中においては、奉公人として仕えた存在である。遊廓社会に限らず、江戸社会の中でどのような役目を果たしたのか、どのような目的で公娼制度が作られたのか。経済事情など様々であるが、遊女らは遊廓社会から搾取されただけでなく、幕府の利益のためにも使われた。しかし、公娼制度は一方で娘の身代金を通じて、困窮する家が破綻するのを防ぐための方法であったが、奉公人として女性が家を出ることで、家族の構造は揺らいだ。また、江戸時代の法律を分析した上で、売春に対する幕府の態度を明らかにする。

四、史料について

江戸中・後期の島原遊廓の遊女を研究するために、様々な種類の史料を取り扱う。

まず、同時代人の島原への眼差しをあらわす文学作品を取り逃すわけにはいかない。架空ながらも、浮世草子・物語・随筆などの記述を通じて事実を把握したい。例えば、井原西鶴の『好色一代男』を通じて、元禄期の遊廓社会の仕組みや、遊女に対する同時代人のイメージが十分に把握

踏まえたうえで、公娼制度に所属した島原遊廓の遊女の例を中心として、ジェンダー史・社会史・比較類型史論の視点から、売春の形が変化してきた江戸中・後期における公娼制度の中で生きた遊女とは、どのような存在であり、どのように位置づけられたのかという問題を考証したい。

三、研究テーマ

まず、身分的周縁論や身分状態論を基にし、島原遊廓の遊女の出身・身分について調べたい。そして、島原に来た理由や過程、そして内部での扱われ方を考察する。このためにも、遊廓の仕組みについて概観し、身売りや性的搾取といった行為を指摘する。また、公娼である遊女の本質を理解するために、江戸時代に描かれた遊女のイメージを明らかにする。史料から当時の事件や証言を導き出し、文学・浮世絵・評判記などと比較することで、遊女のイメージと実像を比較する。江戸時代初期・中期には、遊女は奉公人であり、芸能者であり、親孝行な娘でもあったが、売女（娼婦）としては見なされていなかった。江戸中期までは、欧米と異なり、遊女の性的行為は不道德で恥ずかしい行為として見なされなかったどころか、社会的には忠実な娘として賞賛されていたのである。これは重要な事柄であるので、同時代欧米における娼婦との比較研究を行いたい。

できよう。元禄十年に近松門左衛門が書いた『百日曾我』に見られる架空の傾城奉公人請状の記載から、当時の人身売買的契約の形が推定できる。

このほかの貴重な史料として、随筆があげられる。例えば、江戸後期に浪人の武陽隠士が書いた『世事見聞録』には、遊女の残酷ともいえる生活が描かれ、この吉原遊廓の記述を通じて、その公娼制度や遊女屋の主人に対する批判は、島原にも適用できるであろう。またイギリス外交官のオールコックをはじめ、江戸時代に来日した外国人の随筆からは彼らの日本の公娼制度に対する考えがわかり、客観的且つ比較研究のため、大変有用である。

社会史・女性史の観点から研究をすすめるが、遊女の生きてきた環境をわかりやすく理解するために地図・浮世絵なども調査する。また、遊廓の生活条件や遊女の各階級に伴う様々な情報を手に入れるために、遊女の総人数・格に応じた遊女屋の戸数・太夫や天神といったランク別の遊女の数というような数量分析も研究論文に組み込む。

遊廓は、女郎屋のみならず、様々な商人が店を出す一種の商店街であり、金を多く落とす客を引き寄せる必要があった。それゆえ、遊女評判記や細見などという宣伝書があった。また、親孝行という社会観念を支えるために、幕府も遊女を利用した。幕府や藩は、孝行娘として遊女たち

に褒賞を与えていたことが史料からわかる。ここから、幕府や藩が遊女をどのように考えていたか知ることができる。

遊女は世界的に見ても売春婦として特殊な存在である。孝行な娘と見なされ褒賞され、遊女屋に身売りされても、人身売買として見なされず、性を売るにも関わらず江戸時代後期までは芸能者として見なされ、永遠に奉公契約されても奴隷ではなかった、江戸の人々は彼女たちの身の上を時に可哀想に思っても、社会的には認められていた。江戸時代には徳川幕府が人身売買を禁止し、奴隷の代わりに経済的な関係を元にした奉公契約が成立したが、これが明治期までどのように存在し続けたのかを考えるべきである。そのため、幕法も分析しようと思う。

明治神宮より奨学金助成を受け、平成二十八年十月から翌年八月まで東京に留学することが叶った。このおかげで、様々な研究者と関わることで、とりわけ松井洋子氏に仲介をいただいた佐賀朝氏から『輪違屋文書』という史料をご教示いただいた。私はすぐに京都へ向かい、京都歴史資料館で、この史料を目にすることができた。京都鳥原にある有名な遊女屋・輪違屋に関するこの史料は、これまであまり知られていなかったものであり、江戸・明治の鳥原を知るのに大変貴重である。

五、むすび

この研究テーマは様々な難点をも含む。一番の問題は京都鳥原には史料があまりないということである。それに、女性自身が書いたものは滅多に存在しないので、遊女自らの声を聞くことが殆ど不可能である。それゆえ、男性の視点に限られているため、幻想と事実を区別し、慎重にこれらを読み込むべきである。また、史料の大部分はくずし字であり、まだ慣れていないので、解読に注意を要する。できる限り事実に近い遊女像を描くために、様々な史料の種類を集め、分析しなくてはならない。

しかしながら、珍しい史料であるからこそ、松井洋子氏が論文「近世遊廓社会史の方法をめぐって（特集近世・近代遊廓社会史研究の到達点と課題」、『シリーズ遊廓社会』一・二巻を素材に考える）（『部落問題研究』二二一・二二二号、部落問題研究所、二〇一五年）で指摘した通り、これを丁寧に読み拾い、文学や評判記も吟味しなくてはならない。

参考文献

今西一『遊女の社会史——鳥原・吉原の歴史から植民地「公娼」制まで——』、有志舎、二〇〇七年。

小野武雄『吉原と鳥原（講談社学術文庫）』、講談社、二〇〇二年。

佐賀朝・吉田伸之編『シリーズ遊廓社会1——三都と地方都市——』、吉川弘文館、二〇一三年。

下重清『身売り』の日本史——人身売買から年季奉公へ——（歴史文化ライブラリー三四二）、吉川弘文館、二〇一二年。

杉森哲也『近世京都の都市と社会』、東京大学出版会、二〇〇八年。

曾根ひろみ『娼婦と近世社会』、吉川弘文館、二〇〇三年。

塚田孝『都市の周縁に生きる（身分的周縁と近世社会4）』、吉川弘文館、二〇〇六年。

長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造（歴史科学叢書）』、校倉書房、二〇〇六年。

長野ひろ子『日本近世ジェンダー論——「家」経営体・身分・国家——』、吉川弘文館、二〇〇三年。

牧英正『近世日本の人身売買の承譜』、創文社、一九七〇年。

妻鹿淳子『近世の家族と女性——善事褒賞の研究——』、清文堂出版、二〇〇八年。

藪田貫・柳谷慶子編『身分のなかの女性（江戸の人と身分4）』、吉川弘文館、二〇一〇年。

渡邊大門『人身売買・奴隷・拉致の日本史』、柏書房、二〇一四年。

Amy Stanley, *Selling women: prostitution, markets, and the household in early modern Japan (Asia: local studies/ global themes; 21)*, University of California Press 2012.